第十回

品川能楽鑑賞会

喜多能楽堂
国有形文化財登録記念

令和8年 **3月29日(日)**
13:00 開演（12:00 開場）

喜多能楽堂

チケット 全席指定

S席 ¥4,800　A席 ¥4,500
B席 ¥4,000

前売開始　令和8年 1月20日(火)

主催：公益財団法人十四世六平太記念財団
品川区
公財 品川文化振興事業団
助成：アーツカウンシル東京
［地域芸術文化活動応援助成］

ARTS COUNCIL TOKYO

お問合せ

- 喜多能楽堂
  TEL. 03-3491-8813
  https://kita-noh.com/
- 品川区文化観光スポーツ振興部
  文化観光戦略課
  TEL. 03-5742-6836
  FAX. 03-5742-6893

Photo：©(株)前島写真店・前島吉裕

能舞台全景

鏡板・前田青邨監修

1階ロビー天井意匠

シャンデリアと
2階天井意匠

階段とトラバーチン外壁

令和８年３月、喜多能楽堂の舞台と建物が国の登録有形文化財（建造物）になります。現在の建物は昭和30年に竣工した能舞台をそのままに昭和48年に建設されましたが、貴重な能舞台や前田青邨画伯監修による鏡板はもちろん、御影石張の階段やトラバーチン貼りの壁面など榛沢敏郎氏の設計による建築様式は伝統と近代を併せ持ち「造形の規範となっているもの」として評価されました。
令和７年に竣工した大規模改修工事では内装、外観を刷新するとともに建築の意匠を細心の注意を以て保存することに努めました。
10回目を迎える「品川能楽鑑賞会」は品川区にまたひとつ加わった文化財で能楽をお楽しみいただく記念公演です。

チケット予約購入のご案内

前売開始	令和８年 １月20日（火） 10：00～

WEB

- （公財）品川文化振興事業団
  品川文化振興事業団ホームページ
  https://shinagawa-culture.or.jp
- 喜多能楽堂
  喜多能楽堂ホームページ
  https://kita-noh.com/

窓口販売・電話予約

- （公財）品川文化振興事業団
  ［窓口販売］
  - きゅりあん
  - スクエア荏原
  - メイプルカルチャーセンター（※ 3月15日まで）
  - O美術館

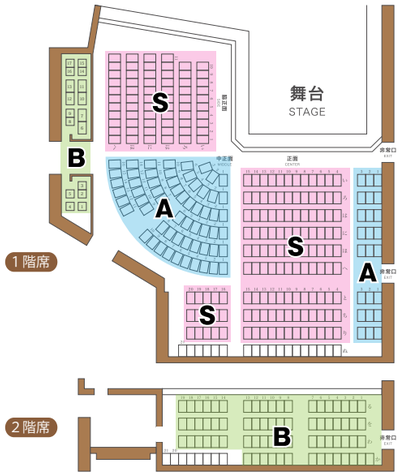
  ［電話予約］ ※ 座席の選択はできません。
  - チケットセンター CURIA（キュリア）
    03-5479-4140
- 喜多能楽堂　令和8年 1月23日（金）より受付
  ［窓口・電話］ 03-3491-8813

ご注意

・車椅子席は喜多能楽堂までお申し込みください。
・未就学児童のご入場はご遠慮ください。　・許可なき撮影、録音はお断りします。
・やむを得ない事情により出演者が変更になる場合がございます。
・公演中止の場合を除き、予約後の変更、キャンセル、再発行はいたしません。

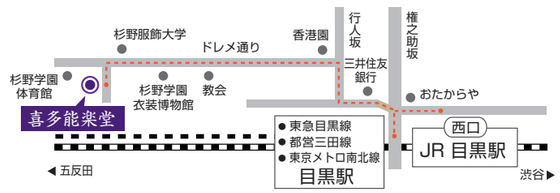
チケット・全席指定

■ S席 ¥4,800　■ A席 ¥4,500　■ B席 ¥4,000



十四世喜多六平太記念能楽堂（喜多能楽堂）

〒141-0021　東京都品川区上大崎4-6-9



JR線・東急目黒線・都営三田線・東京メトロ南北線ともに目黒駅より徒歩７分。
目黒駅西口よりドレメ通りを直進。杉野学園体育館手前を左に入る。
※当能楽堂は駐車場施設がございませんので、お車でのご来場はご遠慮願います。

お問合せ
・喜多能楽堂　TEL. 03-3491-8813（10：00～18：00）　ホームページ https://kita-noh.com/ ▸▸▸▸▸
・品川区文化観光スポーツ振興部文化観光戦略課　TEL. 03-5742-6836　FAX. 03-5742-6893

第十回

品川能楽鑑賞会

喜多能楽堂　国有形文化財登録記念

令和八年　三月二十九日（日）　開場・午後十一時　開演・午後一時

喜多能楽堂（十四世喜多六平太記念能楽堂）

翁

素謡

高林呻二
高林白牛口二

舞囃子

高砂

友枝昭世

大鼓　亀井洋佑
小鼓　飯田清一
太鼓　桜井　均
笛　一噌隆之

金子龍晟
友枝真也
大島輝久
中村邦生
金子敬一郎

高林昌司
佐藤　陽
内田成信
粟谷明生
金子敬一郎

羽衣

舞込

シテ　狩野了一
ワキツレ　御厨誠吾
ワキ　宝生欣哉
ワキツレ　宝生朝哉

能

後見　内田安信
中村邦生

大鼓　亀井洋佑
小鼓　飯田清一
太鼓　桜井　均
笛　一噌隆之

地謡　谷　友矩
塩津圭介
佐々木多門
佐藤寛泰
粟谷浩之
大村　定
香川靖嗣
友枝雄人

午後二時半　休憩（二十分）

狂言

末廣かり

果報者　野村萬斎
太郎冠者　野村裕基
すっぱ　野村太一郎

仕舞

田村

塩津哲生

岩船

香川靖嗣

地謡　狩野祐一
内田成信
友枝雄人
大島輝久

半能

石橋　連獅子

シテツレ　金子敬一郎
シテ　長島　茂
ワキ　宝生常三

後見　塩津哲生
佐々木多門
谷　友矩

大鼓　亀井広忠
小鼓　鵜澤洋太郎
太鼓　小寺真佐人
笛　藤田貴寛

地謡　狩野祐一
友枝真也
大島輝久
佐藤　陽
粟谷充雄
内田成信
出雲康雅
高林呻二

終了予定時刻　午後四時頃

解説

素謡「翁」（おきな）

天下泰平・国土安穏、五穀豊穣を祈る能楽の中で最も神聖視されている曲。神事に奉仕する心で勤める出演者と神事に参加する心の観客とが一体となって、神聖な空間を共にするひとときです。今回は謡のみによる素謡での上演です。

舞囃子「高砂」（たかさご）

肥後国・阿蘇の宮の神主・友成が都見物の途中播磨国・高砂に立ち寄り海を眺めていると老人夫婦がやってきて友成に高砂と摂津国・住吉の松をあわせた「相生の松」の謂われを語ります。そして自分たちこそ高砂と住吉の神であることを明かし、住吉で待つと言い残して小船に乗って沖に消えていきます。友成が老人を追って住吉に着くと月光の満ちる浜辺に住吉明神が現れ颯爽と神舞を舞うのでした。今回は舞囃子の形で住吉に着いた友成が住吉明神の顕現に出会う後半の場面を上演します。

能「羽衣　舞込」（はごろも　まいこみ）

駿河の国、三保の松原に住む漁師の白龍が釣りにやって来ると、一本の松に美しい羽衣が掛っているのを見つけます。白龍がこれを持ち帰ろうとすると一人の女が呼び止め、羽衣は自分のものだから返してほしいと頼みます。女の正体は天人であり衣は天の羽衣と聞かされた白龍は羽衣を国の宝にしようと返そうとしません。羽衣が無くては天に帰れないと嘆く天人の様子を見かねた白龍は羽衣を返す代わりに天人の舞を所望します。羽衣を着けた天人は天上の月世界のありさまを語り三保の松原の春景色を讃えて舞いながら富士の高嶺を超え大空の霞の中に消えていきます。春霞がたなびき海の光がきらめくなかに翻る天人の舞曲は優麗にして典雅、清純の情趣を漂わせて見る者を浄化せずにはおきません。羽衣伝説を元にした能を代表する一曲として広く知られる名曲です。

狂言「末廣かり」（すえひろがり）

宴会の引き出物を用意しようと主人が太郎冠者に末広がりを都に買いに行かせます。しかし末広がりが扇のことと知らない太郎冠者は悪者に騙されて古傘を高く売りつけられてしまいます・・・。取り違えの失敗談が最後には囃子も入り、機嫌を直した主人と太郎冠者は和やかに舞いうたいます。

仕舞「田村」（たむら）

坂上田村麻呂の霊が千手観音の仏力を得て鈴鹿山の合戦で敵を殲滅した様子を物語ります。

仕舞「岩船」（いわふね）

海中の竜神が八大龍王を呼び寄せ宝を積んだ岩船を守護して住吉の浦に送り届けます。

半能「石橋　連獅子」（しゃっきょう　れんじし）

大江定基という貴人が出家し寂昭法師と号し、日本より入唐渡天して仏教の聖跡を拝み巡るうち清涼山へと到ります。その麓の深い谷に架かる石の橋を渡って霊地に赴こうと在所の人を待っていると一人の木樵が現れて、この橋は文殊菩薩の浄土に通じますが安易に渡ろうとしてはなりませんと戒めます。
もとより人が架けた石橋ではなく、幅は一尺（30㎝）より狭く、石の上には滑らかな苔が生えて滑りやすく、長さは三丈（10ｍ）であるが、谷の深さは千丈（3000ｍ）より深く、並大抵の修行の心得では渡ることはできないのです。
木樵はさらに橋の由来を語り、向かいは文殊の浄土であるから今に奇瑞があるでしょうと予言して立ち去ります。
果たしてその言葉の如く、やがて辺りはただならぬ静けさとなり、文殊菩薩の乗り物である獅子が石橋の上に豪快に出現。咲き乱れた牡丹の花に戯れつつ勇壮華麗な威勢を示して、なびかぬ草木もない泰平の世を祝福して舞い収め、獅子の座へと帰ってゆきます。今回は獅子が現れる後場を半能として上演します。